

〔大東文化大学所蔵日本書跡解題〕（監修・古谷 稔）

（大東文化大学図書館蔵・平成十六年受入）

(1) 昭和切古今和歌集 藤原俊成筆

石丸 真 弥

①制作年 平安時代・一二世紀

②材質・形状・員数 紙本墨書・掛幅装・一幅

③本紙寸法 縦二二・四×横一五・七センチ

④表具寸法 縦一一三・〇×横四一センチ

⑤表具仕立 三段表具

一文字・風帯 唐花丸文綴子

中廻し 薄茶無地・絁絹

天地 薄縹無地

軸端 牙丸切軸

懸緒 平打紐（紺糸・白糸の織り交ぜ）

⑥付属品 二重箱

外箱 桐白木箱・平打紐（薄茶地に緑線を織り込む）

箱書 墨書

〔表〕 藤原俊成 昭和切 やまかはに

〔裏〕 飯島春敬記「春」（朱文印）

内箱 黒漆塗箱

箱書 銀字

〔表〕 俊成卿 秋乃哥切

大正五年六月 舊高田藩主榊原家御藏品 御目録 三頁分

小倉百人一首かるた写し 一枚

⑦所蔵番号 J2440・11112668942

『古今和歌集』の断簡。巻第一から巻十までの上巻一冊が、もと榊原家に伝えられていたが、昭和三年（一九二八）に分割され、その年号を記念し、「昭和切」と命名された。その上巻の巻頭部分に介在していた「真名序」（五丁）と「仮名序」（二八丁）の零本一冊が三井家に伝えられるという。が、まだ見る機会を得ていない。下巻の一冊は、早くに散佚したと考えられる。昭和十年九月、東京日本橋の興文社により、複製本『仮名名跡集成1 昭和切』が発刊されているので、今はそれによって全貌（一五五頁分・本断簡は一一九頁）を窺うことができる。本断簡は、『古筆学大成』第三巻（83―84頁）にも個人蔵として所収されている。料紙は斐紙。もとの装丁については、綴葉装の冊子本が通説とされているが、春名好重氏はその著『古筆大辞典』において、粘葉装の冊子本であったものが、後に大和綴になったと記されている。今やその原形がどちらであったか詳らかでないが、少なくとも、後世に仕立て直され、何等かの形で綴じられていたことは明らかである。それ故、本紙の上下に二つずつ孔がある。本断簡においては、その孔が左端に確認でき、右頁であったことがわかる。上部の孔の間は一・四センチ、下部の孔の間は一・五センチ、上下の孔の間は七・八センチ、それぞれ左端から〇・六センチ内側に存在する。

筆者は、七番目の勅撰集『千載和歌集』を撰進したことも著名な藤原俊成（一一一四―一二〇四）。道長の第六子長家の曾孫である。俊成は初め、顕広と称していたが、仁安二年（一一六七）、五四歳の時に俊成と改名、安元二年（一一七六）、六三歳で出家、釈阿と号し、元久二年（一二〇四）、九一歳の高齢で亡くなった。『昭和切』は、俊成の署名がある前田育徳会蔵の「広田社二十九番歌合」や消息等と同筆であり、真筆であることが明らかである。俊成は改名のたびに、その時々々の署名をしており、書風の変遷を判別することができる。「昭和切」は、「日野切千載和歌集」や「住吉切五社百首」（七七歳）に酷似し、俊成様の定着が窺

えることから、七十代中頃の筆跡と推察される。俊成は、「顕広切」・「御家切」・「了佐切」・「昭和切」と『古今和歌集』を少なくとも四回書写しており、「昭和切」は最も晩年の筆と考えられる。

俊成の書は、字形にも用筆にも独特の奇癖偏習があり、ほぼ同時代に活躍していた、藤原伊行・藤原教長等とはその趣を異にする。線には強い張りがあり、起筆の鋭鋒とはげしい転折によって生じる書風は独自のものである。「や」の形を扁平にし、横の彎曲を強調したところや、「の」の円内の斜線を強くし、一気に上にあげて書くところ等は、俊成の特徴といえる。草仮名を多用せず、簡略な仮名を主として展開している。

本断簡においては、『古今和歌集』巻第五・秋歌下の三〇三・三〇四番（『新編国歌大観』歌番号・以下同様）の二首と三〇五番の詞書までが書写されている。十一行で構成され、詞書は、二、三字下げたところから書かれている。墨つぎは、一行目の「し」・三行目の「や」・五行目の「い」・七行目の「み」・八行目の「風」・十行目の「亭」・十一行目の六字目の「の」で、計七回おこなわれている。かすれは無く、墨の濃淡の変化が実に美しい。「継色紙」と同様に、筆先の道筋を見ることがができる。一行目「よめる」の「よ」の、二筆目が二本確認できるが、下部で交差している点を踏まえると、筆が割れたのではなく、再度、二筆目を書いたと推考される。

分割前の上巻の冊子には、巻末に一紙を加えて、古筆了佐（一五七二—一六六二）の極書が書かれていた。この極書は、付属品の御目録によっても確認することができる。その内容は、

這古今集上巻全部者

五條三位俊成御真蹟無疑

者也春哥之内不足之処

あをやきのいとよりかくる春しもそ

みたれて花のほころひにける

右之哥一首定家卿書入給

者也誠可謂敷錦上花者歟

似彼是無双之至寶不可

過之候雖憚多依御所望

聊證之

寛永八曆卯月廿五日 古筆（印）「琴山」

了佐（花押）

というもの。これによって、寛永八年（一六三二）にはすでに、下巻の一冊は亡失していたことが窺われる。また、息子の藤原定家（一一六二—一二四二）が脱落していた「あをやきの云々」の歌一首を加筆していることから、この「昭和切」は、かつて俊成から定家に相伝され、他本と校合したことが知られる。

《釈文》

しかの山こえにてよめる

春道のつらき 列樹

やまかはに風のかけたるしからみは

なかれもあへぬもみちなりけり

いけのほとりにてもみちのちるを

よめる

みつね

風ふけはおつるもみちはみつきよみ

ちらぬかけさへそこにみえつ、

亭子院御屏風のゑにかはわたら

むとする人のもみち、るきのもとに

一 夕 乃 乃 乃 乃 乃

春 道 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃